

ヤマタノオロチの頭を探して

宇野真一

1. 神話と景観

出雲を舞台とした“スサノヲのオロチ退治”は最もポピュラーな神話のひとつである。

しかし、『記紀』とほぼ同時期に編纂された『出雲国風土記(以下風土記)』にはオロチ神話そのものの記載がなく、全世界に共通するペリセウス・アンドロメダ神話と同じ構造をもつことから古事記創作説を唱える人もいる。その一方で、オロチの正体を斐伊川の氾濫、越を本拠とした先住部族、斐伊川上流の製鉄部族などに比定した多くの説も存在している。

奥出雲にはスサノヲとオロチに関する歴史的地物が多く残されており、なかには社や祠が設けられて信仰の対象となっているところもある。伝承の中には後世の創作・改変によるものもあるが、かりにそうであったとしても、なぜその場所が選ばれ、オロチに関する伝承が付与されてきたのであろうか。

今回、第3分科会では、奥出雲に伝えられてきた歴史的地物の意味について、地勢・景観的視点から考えてみることにし、ヤマタノオロチ伝説の主舞台である雲南市木次町を訪れた。

2. オロチ伝説にまつわる地物と分布 (歴史的地物の分布図、視察地 ~ 写真説明)

今回視察を行った地物は以下のとおり。

表 - 1 歴史的地物の伝説・由来

歴史的地物	伝説・由来など	備 考
天ヶ淵	直進していた斐伊川が急に湾曲する瀬先で、オロチが棲んでいた場所とされる	木次町湯村北方。 天ヶ淵公園として整備されている。
万歳山・温泉神社	足名椎・手名椎が稲田姫とともに住んでいたとされる。山頂近くにある大岩は両神の御陵といわれている。	天ヶ淵右岸の丘陵(256m)。 山腹にある温泉神社境内に足名椎・手名椎を祀った神石がある。
長者の福竹	足名椎・手名椎が稲田姫を連れて、一時この地逃れたとされる。	天ヶ淵北東2km、長さ300mほどの尾根。 蛭子命とスサノヲを祀る蛭子神社と向かい合う。
伴昇峰	足名椎・手名椎が稲田姫を伴って昇ったとされる峰。	万歳山北西の峰(405m)か長者の福竹東方の固唾畦(425m)と推測される。
印瀬の壺神・八口神社	オロチに飲ませた酒を入れた壺の一つが祀られている。	木次町西日登の丘陵部(200m)。 風土記記載とは別の八口神社。
御室山・須布神社	八塩折の酒を造るため、スサノヲが御室を設け宿られた地とされる。	木次町北西部の室山(260m)。 須布神社がある。
() 釜石	オロチ退治の酒をつくる際に、酒米を蒸したといわれる大岩がある。	現在は農道整備によって分断されているが、かつては室山と同じ尾根上にあったと考えられる。
八本杉・斐伊神社	オロチ退治ののち、スサノヲが八つの頭をこの地に埋め、その上に八本の杉を植えた。	木次町北端の斐伊川右岸の平地。 本来は斐伊神社の境内か。

3. 視察地の景観類型

それぞれの視察地を景観類型に分類すると以下のとおり。

表 - 2 景観類型と視察地

(景観類型は樋口忠彦「日本の景観」による)

景観類型	特徴	視察地
「隠国(こもくり)」型景観	そこに流れる川を上流に遡った谷の奥、日常的というよりは宗教的空間の性格が強い。	印瀬の壺神
「神奈備山」型景観	集落近くにあって周囲の山に比べて姿・形がよく、鬱蒼とした樹林に覆われている。	万歳山、 伴昇峰、 御室山
「国見山」型景観	自分達が住んでいる土地を全体的に眺められる丘陵や小山。	温泉神社、 長者の福竹、 斐伊神社

- ・ 温泉神社、 長者の福竹、 印瀬の壺神はがあるのは、谷あい・山の辺の小集落で、古代でも水のコントロールが容易な小河川の上流・支流沿いに位置する。
- ・ 斐伊川右岸の平坦地にある 八本杉は、本来、斐伊神社の境内と考えられる。斐伊神社(風土記・樋社、祭神スサノヲ・稲田姫)は菟原野(風土記)の北端に位置し、城名樋山(風土記)と斐伊川・三刀屋川の合流地点が一望できる場所にある。
- ・ 御室山では圧倒的景観に出会えた。須布神社の鳥居をくぐり石段を2mほどあがっただけで、北西方向には仏経山(風土記・神名火山)や峯寺山(風土記・伊我山)が、南方には 万歳山、 伴昇峰、そしてオロチ退治の場所との伝承がある岩伏山が、東方には大東町西阿用東方の山(風土記・阿用山)が望める。

次に、歴史的地物のある場所には以下のような共通する特徴が見られた。

- ・ オロチ神話にまつわる地物は、斐伊川右岸の丘陵地に集中している。
- ・ 眺望のよい山の峰に位置し、あるいは近接している。(これを特異点と呼ぶこととする)
- ・ それぞれの特異点からは、少なくとも1ヶ所以上、肉眼で別の特異点を確認できる。
- ・ 御室山はすべての特異点から確認できる。

(特異点の配置、標高、位置関係、断面図、見通し線について説明)

よって、歴史的地物について次の仮説を立て、その考察を行ってみた。

～仮説～ 御室山は情報・交通の結節点ではないか。

～仮説～ 見通し線は、特異点が通信の中継ポイントであることを示している。

～仮説～ 古代、川筋の道とは別に尾根筋の道があったのではないか。

4．仮説に対する考察

以下の示す仮説は地勢・景観の視点から見た可能性の指摘であり、今後、歴史的検証を加える必要がある。そのなかで、奥出雲から山陽地方における地物との関連性も併せて検討していきたいと考えている。

～仮説～ 御室山は情報・交通の結節点ではないか。 （『風土記』における烽の配置）

古代における通信手段は駅家（うまや）と烽（とぶひ）であり、『風土記』には駅家・6ヶ所と烽・5ヶ所の記述が見られる。烽は軍防令に「凡そ烽を置くは、みな相隔たること四十里（約21.4km）もし、山岡隔絶している場合は、便宜に従って置け」とるが、確かに風土記記載の5烽は島根半島に沿って直線距離15～20kmごとに設置されている。

宍道湖南岸沿いは最も近い土棕烽と布自枳烽でも40km近く離れているが、ここに、御室山と八雲山を配置することによって、同じく15～20km間隔による通信網が完成する。

御室山は、出雲郡と奥出雲各地を結ぶ通信拠点だったとは考えられないだろうか。

～仮説～ 見通し線は、特異点が通信の中継ポイントであることを示している。

（伝達ルート）

烽とは、非常に際して昼は烽火を挙げ、夜は松明を点じて急を知らせる施設である。

よって、別の烽と照応できること、近くに水があること（釜石付近には小さな池がある）そして集落に近く管理する人間がいることが立地条件となり、特異点はこの条件をおおむね満たしている。

今回視察した地物の配置からは、天ヶ淵（＝斐伊川の氾濫観測地点）→万歳山→御室山→土棕烽→斐伊川下流地域といった災害情報伝達ルートも想像できそうである。

～仮説～ 古代、川筋の道とは別に尾根筋の道があったのではないか。 （古代の道）

技術の発達によって急流大河川をもつ山岳地の盆地が開発されてくるのは戦国時代からと言われている。（治水技術の代表例は武田信玄・甲州流技術）

古代においても大量の物資運搬には水運を用いていたと考えられる。しかし、斐伊川および川筋の道は増水時に通行不能となるため、当然、牛馬を利用した山越えルートも存在していたと想像できる。

大河川に対する治水技術が確立していなかった古代には、自分の現在位置を確認しながら進む尾根筋の道があり、足名椎・手名椎の逃避ルートもその道だったのではないか。

5. オロチ神話の謎について

オロチ神話にはさまざまな解釈がなされているが、代表的なものを以下に示す。

土木技術を持った部族(スサノヲ)が毎年氾濫する斐伊川(オロチ)を治水し、農地開拓と砂鉄を用いた製鉄を行った。

昔の製鉄技術を持った先住部族(越の国を本拠とする)と新しい製鉄技術を持った新興部族(新羅からの渡来系:スサノヲ)が争い、新興部族が勝利した

上流の製鉄部族による鉄穴流しが原因で斐伊川の河床が高くなり、そのために毎年斐伊川が氾濫を起こすことから、下流の農耕部族(スサノヲ)が製鉄部族と争い農耕部族が勝利した。

内容を整理すると ①は斐伊川治水、②は先住部族と新興部族の争い、③は細部では異なる点もあるが ①と②が一つになった話とも考えられる。

奥出雲との関係性はあまり見出せないが、このほかにも、新羅侵攻説、越との争い説、オロチ神話そのものの他国伝承説などもある。

次にオロチ神話の謎解きに挑戦してみた。ただし、神話の解釈・分析については、もとより素人の思いつきであり、その正否を問うことはしないという前提である。

～ 神話の謎 ～ オロチ退治にまつわる歴史的地物は、なぜ斐伊川右岸にあるのか？

(地名由来・伝承、神社分布図)

出雲古代史におけるスーパーヒーローとされるスサノヲだが、『記紀』と『風土記』におけるスサノヲ像には大きな隔たりがあるとも言われている。

『風土記』における地名由来・伝承を飯石郡・仁多郡・大原郡について調べてみると、オホナムチ由来 11 箇所に対しスサノヲ由来のものは3ヶ所しかない。対象を『風土記』全体に広げてみてもスサノヲ本人に関する記述はこのほかには安来郷にあるだけで、残りは御子神に関するものである。

次に、飯石郡・仁多郡・大原郡で『風土記』に神祇官ありと記載されている神社について、その主祭神を「島根縣神社概説(昭和17年)」で調べてみると、20 社中、主祭神スサノヲの社が 8 社、主祭神オホナムチのものが 3 社、郷土神 5 社、そのほか 4 社であり、ここではスサノヲの存在が大きい。

ここで神社の位置を調べてみると、主祭神をスサノヲとする神社は須佐以外では斐伊川中流と赤川に囲まれたエリアに集中しており、スサノヲ信仰圏の拡がりとおロチ神話の分布が重なっているようにも思われる。

ちなみに3郡ごとの主祭神別神社分布は、飯石郡では須佐・熊谷周辺にスサノヲの分布が見られ地名由来の分布ともほぼ一致し、仁多郡では主祭神・地名由来ともにオオナムチ圏といえ、スサノヲの姿はほとんど見られない、大原郡では赤川以北がオオナムチエリア、赤川以南がスサノヲエリアに分かれるといった特徴が現れている。

～ 神話の謎 ～ スサノヲのオロチ退治は、何を意味するのか？

前章でも述べたように、大河に対する治水技術が確立したのは戦国時代からであり、さらに下流平野部の開発が進められたのは江戸時代になってからのこととされている。つまり、スサノヲが斐伊川の氾濫(オロチ)を治めた(退治した)という説は、設定そのものに無理があると思える。

また、稲田姫(農神)との結婚は、スサノヲの農耕生産への寄与を示しているとの説についても、『記紀』に記載されている高天原でのスサノヲの行動は明らかに反農業・反稲作的であること、『風土記』におけるスサノヲは国巡りしか行っておらず、国づくり・農耕生産への寄与を思わせる記述はオホナムチに顕著であることから、これも疑問である。

松前健「出雲神話」が指摘するように、オロチ = 水神、稲田姫 = 農神と捉え、かつては水神と農神が擬制婚を行い豊作を祈る儀式が存在していたのではないか。その後、動物神信仰が衰退することによって水神(オロチ)が女性を食べる怪物に堕していき、これにかわってスサノヲ = 人間的英雄神が登場したと考えられないだろうか。

『風土記』に記載されているタマヒメとワニの話は、水に棲む細長い動物 = 水神が女性との結婚に敗れるという話の構造がオロチ神話と同じであり、これが『古事記』におけるオロチ神話のベースになったとも想像できそうである。

6. 地域資源としてのオロチ神話の活用

オロチ神話は全国的にも知名度が高く、島根県の文化観光資源の一つとなっている。

しかし、残念なことに県内に残る伝承地はその存在すらほとんど知られておらず、現地視察を行ったときも、案内情報・アクセス・施設そのものが整備されていないという印象を持たざるをえなかった。

しかし、オロチ神話はそのものは非常に知的好奇心を喚起する素材で、第3分科会では先ほどの謎解き？以外にも“鉄穴流しは本当に斐伊川の氾濫原因になっていたのか？”あるいは“先住部族、新興部族はどのような部族であったか？”といったテーマに挑んだメンバーもいたほどである。

個人的な経験としても、『風土記』というガイドブックを手にし、奥出雲の景観に歴史的意味を見出していく経験ができたことは、非常に心楽しく、神話のふるさと島根に住んでいることの幸せを感じられる出来事でもあった。

今回訪れた雲南市木次町をはじめ、加茂町、大東町(ともに現雲南市)、仁多町・横田町はオロチ神話の伝承が数多く残されている地域である。

旧大東町には須賀神社をはじめ、天叢雲剣の関係性に興味を引かれるモリブデン鉱脈などが存在し、旧加茂町には天叢雲剣発祥地といわれる御代神社跡、オロチを矢で射ったことが名前の由来となっている矢口神社(現・八口神社)などがある。あるいは、オロチ神話や『風土記』と加茂岩倉遺跡との関係性も興味深い。

奥出雲には斐伊川沿いに展開するオロチ神話のラインが、雲南市には須佐神社から須賀神社までの続くスサノヲのラインがおぼろげながら見えそうな気がする。

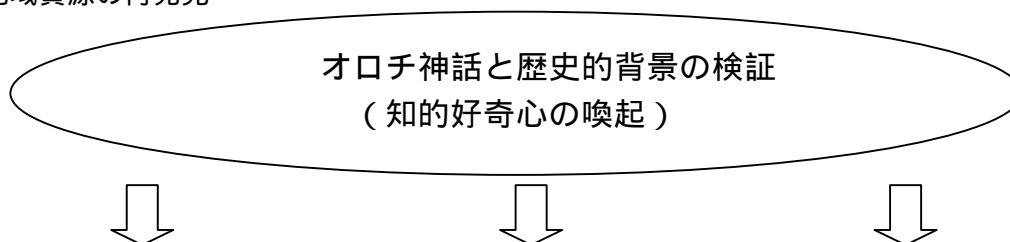
オロチ神話などの歴史的遺産を再検証し、再構築していく方策はないのだろうか。

頭にまつわる伝承の多い旧木次町には湯村温泉が、しっぽにまつわる伝承の多い旧大東町には海潮温泉があり、両者の間には奥出雲ワインで有名な食の杜といった観光施設も多く存在している。

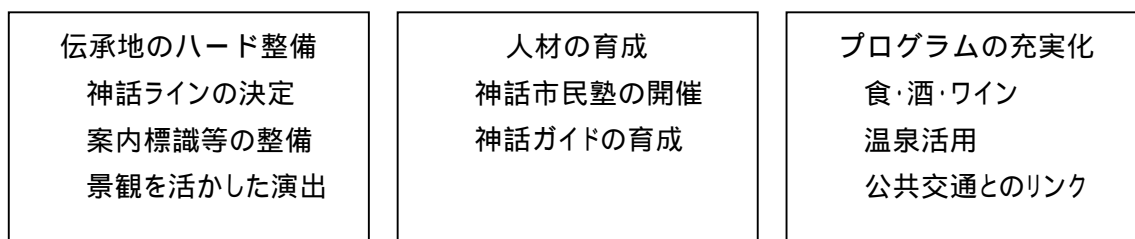
これら全てをオロチ神話・スサノヲ伝承のラインに載せ、新たな観光資源として有効活用していきたい。その糸口のひとつになればというのが今回のレポートの最終的目標でもある。

最後に、オロチ神話を地域の活性化に繋げてゆくための見取図を示して、おわりとしたい。

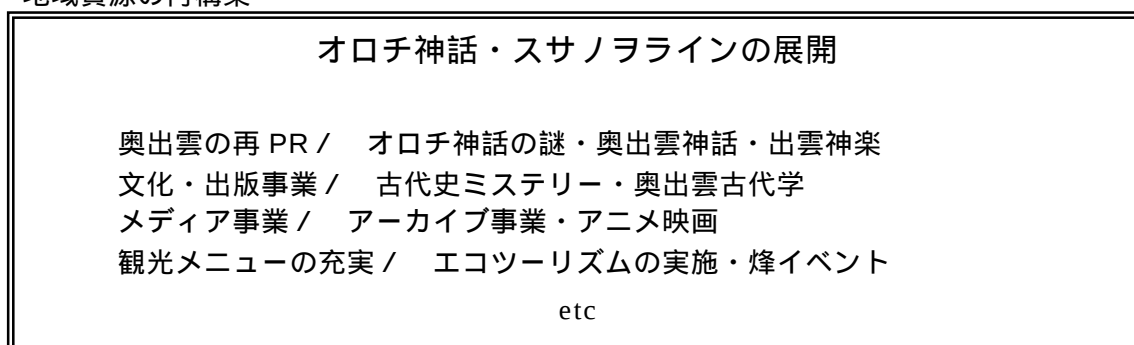
～ 地域資源の再発見 ～



～ 地域資源の再検証 ～



～ 地域資源の再構築 ～



～ オロチ神話伝承地の観光資源化 ～

